

# フォルテピアノの復興とベートーヴェン作品

松村 洋一郎

## 1. はじめに

1960年代以降広く普及した古楽復興運動は、1970年代後半以降には19世紀の音楽までをその対象とするに至った。その結果、今日、フォルテピアノ<sup>(注1)</sup>によって古典派、ロマン派の作品を演奏することは、我々にとって既になじみ深いものとなっている。ベートーヴェンのピアノ作品について考えてみても、フォルテピアノで演奏されたピアノ協奏曲や、ピアノソナタを数種類の全集CDで聞き比べることが出来る状況になっている。しかし、フォルテピアノの復興について、いまだにまとまった形で記述されたことは無かったように思われる。ベートーヴェンを含む1800年以降の音楽を当時の楽器で演奏する活動は、1970年代後半以降に大きな盛り上がりを見せたのだが、特にそれ以前の状況については、明らかにされてはいない。そして、今まで数多く行われてきたベートーヴェンの受容研究においても、フォルテピアノの復興や演奏史のなかで扱われたものは無かったように思う。

そこで本稿では、フォルテピアノの復興の歴史を、その初期からおおよそ1970年までの期間において概観し、さらにそのなかで、ベートーヴェン作品の演奏、そしてベートーヴェン作品への取り組みを位置付けることを、試みる。なお今回の調査では主に、フォルテピアノを主題にして書かれた文献と、1970年までに録音・発売されたフォルテピアノ演奏によるレコードをその対象とした。

## 2. 復興の初期の事例

まず初めに、フォルテピアノ復興の初期において、つまり19世紀末から20世紀初めにかけて、どのように復興がなされたのか、特徴的な事例を見ていきたい。

フォルテピアノは、公開の場で演奏される機会がほとんど無くなったと思われる後も、博物館や個人のコレクションによって収集、保存がなされてきた。その様に個人でコレクションを形成した人物で重要な役割を果たしたのが、例えばヴィルヘルム・リュック(1849-1912)、ヨハン・クリストフ・ノイペルト(1842-1921)といった人々たちである。ヴィルヘルム・リュックは、ニュルンベルクでオルガニストを務めていた人物で、その地で古い楽器の収集を始めた。それらの楽器は、ハンス(1876-1940)やウルリヒ(1882-1962)といった彼の息子たちに受け継がれ、さらにそのコレクションを充実させていく。とりわけウルリヒは、後述するように、ヴァルター製フォルテピアノの復元作業を主導したことで特筆される。ノイペルトは、バンベルクでリュックとほぼ同時期に楽器の収集を始めた。彼は、1868年にノイペルト社をピアノ製作会社として設立した。つづいてノイペルト社は、1907年から08年にかけてドイツの会社としては初めてハーブシコード、クラヴィコード、フォルテピアノの製作を手がけるようになった。楽器の収集も継続して行われていたようで、1968年にそのコレクションがニュルンベルクのゲルマン国立博物館に寄贈された際には、その数は250以上にもなっていた。また、そのコレクシ

ンの一部は、1939年にハレのヘンデル記念館に移管されている。

こうした各種の楽器コレクションは、古い楽器への関心を喚起し、その結果としてフォルテピアノの復興に対して、大きな原動力のひとつとなったことは確かである。

そして、公開の場所でフォルテピアノが演奏された記録は、20世紀初頭より見られるようになる。ハスケルが指摘しているように、1906年頃にはミュンヘンで「フォルテピアノ協会」が設立され、18世紀の音楽をそれにあった楽器で演奏した。だが、初期の試みはおそらく良好な状態の楽器に恵まれなかったために、あまり良い反応を獲得することが出来なかったようである。例えば1907年には、「少なくともハーブシコードはピアノと違う音がするが、フォルテピアノはピアノよりひどい音がするだけだ」という批評が発表されている（ハスケル：1992、324頁）。しかし、専門家や聴衆に強くアピールする活動が全く無かったわけではない。

フォルテピアノ演奏の重要な例として、イゾルデ・アールグリム（1914-1995）の活動<sup>（注2）</sup>に触れておかなばならない。彼女は1930年代からウィーンで活動したハーブシコード、フォルテピアノ奏者であり、そのキャリアの初期から古い鍵盤楽器の演奏を行っていた。彼女が古い楽器に強い関心を抱くようになったのは、1934年に楽器収集家のエーリヒ・フィアラ<sup>（注3）</sup>と出会ったことがきっかけであった。その後、アールグリムとフィアラは協力し合って、フォルテピアノを含む古い楽器を使用した演奏活動を展開していく。アールグリムは、1936年に最初のフォルテピアノ（1790年、ウィーン、ミヒャエル・ローゼンブルガー製）を20シリングで買い求め、1937年には「専門家と愛好家のためのコンサート Concerte für Kenner und Liebhaber」シリーズを開始した。これは、主に18世紀の音楽をその時代の楽器を使用して演奏する演奏会で、以後20年間で74回のコンサートが開催された。1937年6月3日に行われた第2回では、ルドルフ・シュテルツハンマーによって修復されたローゼンブルガー製のフォルテピアノを使用して、モーツァルトの作品が演奏された<sup>（注4）</sup>。1945年には、『「専門家と愛好家のためのコンサート」は、ウィーンが真に誇るべき音楽文化の一例である』（Watchorn：1994、p. 21）と評価されており、この時期までにアールグリムの活動が定着していたであろう事がうかがえる。そして、1950年には、モーツァルトのピアノソナタ、ピアノのためのロンド、および幻想曲を全曲演奏するコンサートシリーズを行っている。この際には、1770年代から1780年代にかけて製作された、3台のオリジナルのフォルテピアノが用いられている。

さて、この時期の演奏会でどの位フォルテピアノが用いられたのか、そしてベートーヴェン作品がどの位演奏されたのか、という点については、まとまった形で報告されたものがなく、本稿においても演奏会情報を包括的に調査することは出来なかった。Watchornの論考によってアールグリムの活動の概要と意義が明らかにされたように、今後個別の演奏家、製作者についての調査を進めることによって、この時期のフォルテピアノをめぐる状況を明らかにしていくことが求められるに違いない。

では次に文献を通じて、フォルテピアノとそしてベートーヴェン作品がどのように扱われてきたのかを見てみることにしよう。

### 3. 文献から見るフォルテピアノの復興

#### 3.1. 初期のフォルテピアノ関連文献

フォルテピアノを古い楽器、あるいは歴史的な楽器として扱った文献は、19世紀後半から見られる。これらがフォルテピアノの復興に関連した最初期の文献ということが出来るであろう。初期の文献の多くは、保存されている楽器を紹介するといった内容のものであり、作品や演奏上の問題との関連は意識されていない。そして、作曲家自身が所蔵していた楽器や、あるいは伝記上の出来事に関係している楽器が、主として取り上げられている。

ベートーヴェンに関する文献を見てみると、こうした内容の文献で最初のもは、1875年に書かれたエドゥアルト・ハンスリックの「ベートーヴェンのエラール製ピアノ」(Hanslick: 1875)と、バンネリールの「ベートーヴェンがセバスティアン・エラールから受け取ったピアノ」(Bannelier: 1875)である。両者の文献は、表題のように、1803年8月7日にベートーヴェンがエラール社からピアノを受け取った事と、そのピアノがリンツの北オーストリア州立博物館に所蔵されている事を報じたものである。この種の文献は、この後20世紀はじめまでに少なくとも10件強が著されている。それらは現存する3台の、ベートーヴェンが所蔵していたフォルテピアノのいずれかを紹介したものである。その3台とは、それぞれエラール製(1803年、パリ、リンツの北オーストリア州立博物館所蔵)、ブロードウッド製(1817年、ロンドン、ブダペストのハンガリー国立博物館所蔵)、グラーフ製(1823-25年、ウィーン、ボンのベートーヴェンハウス所蔵)のフォルテピアノである。しかし、これらの文献はいずれも論考と呼べるものではなく、短い紹介記事に留まっている。

さて1930年代には、広範囲を対象を扱った「ピアノ史」(ピアノ音楽史ではなく、楽器の歴史としてのピアノ史)が記されるようになる。これらは古い楽器に対する関心の高まりを示すものであろう。1930年にはフィリップ・ジェームスの『初期の鍵盤楽器：その始まりから1820年まで』(James: 1930)が出版され、続いて1933年には、ピアノ史の研究においてエポック・メイキングな文献が出版された。それはロザムンド・ハーディングの『ピアノ・フォルテ：1851年の大博覧会までの歴史』(Harding: 1933)である。この著作は、1825年以前のウィーン製のフォルテピアノにおおよそ共通して用いられた構造について言及していない、という欠点はあるものの、初めて包括的に記されたピアノ史であるという点で先駆的な意義がある。ちなみに、ハーディングは前述したリュックとノイペルトのコレクションを、重要な資料として参考にしながらこの著作を執筆した。

さて、これと前後する時期にベートーヴェンに関して書かれた文献を見てみると、それぞれの楽器の相違に焦点を当てた文献が現れていることが分かる。それらの文献では、ベートーヴェンが所有していた楽器が、それらを使用して作曲されたであろうピアノ作品と対照する形で扱われている。そうして、各々の楽器の音域やペダルの種類といった機能的な特徴と、それらがピアノ作品の中に反映されていることを指摘している。しかしこれらの文献では、主に事実の指摘や紹介をしているのみであり、そのなかに演奏との関係した視点は見られない。こうした文献の例としては、テオドール・フォン・フリンメルの「ベートーヴェンのクラヴィーアから」(Frimmel: 1902)、ゲオルグ・キンスキーの「ベートーヴ

エンとハンマークラヴィーア」(Kinsky : 1927)、アルブレヒト・ガンゼの「ベートーヴェンの楽器製作に対する関係」(Ganse : 1939)、マックス・シュナイダーの「クラヴィーアの境界」(Schneider : 1940)を挙げることが出来る。

### 3.2. 演奏習慣の研究と関連したフォルテピアノ文献

このような段階を経て、次に新たな視点を持って書かれた文献が現れてくる。それらは、演奏習慣の研究と結びついた形で、フォルテピアノを論じたものである。フォルテピアノの復興において、ある音楽作品を演奏する際には、当時の演奏習慣を研究し、その作品が作曲された当時の楽器、または作曲家が想定していた楽器（あるいはそれらの正確で忠実な復元楽器）を用いるべきである、という考え方が大きな推進力となってきたことは、言うまでもない。

こうした問題は、まずモーツァルト研究において取り上げられ、論じられた<sup>(注5)</sup>。それは、最初に1930年代のドイツから始まり、徐々に広がりを見せていった。

演奏との関連でフォルテピアノを論じた最初の論考は、おそらく、1931年に発表されたローラント・テンシェルトの「モーツァルトのクラヴィーアとの関係」(Tenschert : 1931)である。この論考の要旨は、モーツァルトの作品は、現代のピアノとは違う楽器で異なった奏法を用いて演奏しなければならない、ということであり、今日では欠かすことの出来ない視点を最初に提供したものであった。テンシェルトの論考を端緒として、モーツァルト作品がどのような楽器を意図して作曲されたのか、そしてどんな楽器が演奏に適しているのか、という問題を扱った論考が続けて発表されている。

1933年には、ハンス・ブルナーの「モーツァルトにおけるクラヴィーアの響きの理想と彼の時代のクラヴィーア」(Brunner : 1933)が書かれている。ブルナーは、ヴェンツキー製クラヴィコード、ジルバーマン製スピネット、シュマル製タンジェント・ピアノ、シュトライヒャー製フォルテピアノ、シュタイン製フォルテピアノ、現代のピアノ、といった6種類の楽器を比較し、モーツァルトのクラヴィーア作品の演奏にはどんな楽器が適しているのか、を考察した。その結果、彼は、シュタイン製のフォルテピアノが最適であるとしている。

そして、ブルナーの研究を受けてこの問題を取り上げたのが、ルドルフ・シュテークリヒの「モーツァルトのピアノが再び鳴り響く」(Steglich : 1937)である。彼は、ザルツブルクのモーツァルト博物館が所蔵するアントン・ヴァルター製のフォルテピアノを取り上げて構造上、音響上の特質を論じ、モーツァルトのピアノ作品をこの楽器で演奏することの重要性を指摘した。そして、この楽器がヴィルヘルム・リュック社で復元され、それが1937年8月21日にザルツブルクの祝祭音楽祭で演奏されたことを報じている。なおこの復元作業に関しては、作業を主導したウルリヒ・リュックによる報告書が発表されている(Ruck : 1956)。また彼は、クラヴィコードとヴァルター製フォルテピアノを、それぞれ現代のピアノと比較しているが、さらに、モーツァルト時代のフォルテピアノとすぐ後の時代のフォルテピアノとの比較も重要であるとして、先のブルナーの研究の意義を高く評価している。

そして1957年には、演奏解釈の手引書であるパドゥラ＝スコダ夫妻の『モーツァルト解釈』

(Badura-Skoda : 1957、邦訳はバドゥラ = スコダ 1963) が出版されるが、それは、上記のような歴史的楽器の音響を復元する試みがあったからこそ成り立ったものといえるだろう。そして、当時までにワグネル・ランドフスカなど限られた演奏家が、フォルテピアノを意識してモダン・ピアノでモーツァルトを演奏していたが、こうした一連の研究が発表されることで、よりフォルテピアノや歴史的な演奏習慣への意識が高まっていたことがうかがえる。1950年代には、「モーツァルト年鑑 Mozart-Jahrbuch」に演奏習慣に関する論文がいくつか発表されており、モーツァルト研究において演奏解釈の問題が主要な研究分野のひとつとして確立されていく様子がうかがえる。モーツァルトに関しては、フォルテピアノの復興は、比較的早い段階から歴史的な演奏習慣の追求と関係しあう形で展開してきたといえよう。

さて、次にベートーヴェン文献に目を転じてみよう。1970年以前に発表された論考で、ベートーヴェンとフォルテピアノを主題にしたものは少ない。その中でも、ブルンナーが行ったような実際の演奏を意識した楽器の比較研究としては、属啓成の「ベートーヴェンのクラヴィーア」(Sakka : 1967)を挙げることができるのみである。この論考では、主にベートーヴェンが所蔵していた現存する3台のフォルテピアノを比較している。その3台とは、前述のようにエラール製、ブロードウッド製、グラーフ製のフォルテピアノである。この論考では、ベートーヴェンはより広い音域と大きな音量を備えた楽器を好んだということが言われている。それは、ベートーヴェンが時代を経るに従って、シュタイン製やヴァルター製などウィーンのフォルテピアノからエラール製、ブロードウッド製そしてグラーフ製へと広い音域と大きな音量の楽器を所有していたことが根拠となっている。例として、1803年に贈られたエラール製のフォルテピアノが作品の様式の変化に影響したことを挙げている。この楽器は、それより以前に使用していたヴァルター製フォルテピアノに比べて幅広い音域( $F_1-c^4$ )を持ち、イギリス式アクションと膝ではなく足で操作するペダルを備えていた。そして1804年に完成された《ピアノソナタ第21番(ヴァルトシュタイン)》作品53以降の作品、《ピアノソナタ第23番(熱情)》作品57などに新しい高音やペダル記号の使用、劇的な表現が見られるようになるからである。ここにおいては、現存している3台の楽器が比較の対象として重要視されており、前述したブルンナーの論考と比較してみても、比較対象の選定や対象への価値のおき方において偏りがないとはいえない。

しかし、1970年により広い視点からこの問題を論じた論考が発表された。ウィリアム・ニューマンの「ベートーヴェンのピアノ対、彼のピアノの理想」(Newman : 1970)である。ここでニューマンは、まず先行する属の論考の問題点を指摘している。それは、ベートーヴェンが実際に所有していたかあるいは弾いたことが分かっている楽器は、10台以上あるが、そうした楽器のなかで現存しているものは前述した3台であるため、必要以上にそれらの3台が重要に扱われてきた、ということである。ニューマンは伝記上の情報から、ベートーヴェンがエラール製やブロードウッド製のフォルテピアノに必ずしも満足していなかったこと、そして1796年にヨハン・アンドレアス・シュトライヒャーからピアノを贈られて以来、晩年にいたるまでベートーヴェンはシュトライヒャー製のフォルテピアノを好んでいたことを指摘した。そのうえで彼は、19世紀初頭の各種のフォルテピアノについて、音域、ペダル装置、アクション、音色といった面から比較し、ベートーヴェンが好んだフォルテピアノについて分析・考察を行

った。その結果ニューマンは、ベートーヴェンはウィーン式アクションを持つフォルテピアノを好み、シュタイン製やシュトライヒャー製あるいはそれらの流れをくむ楽器を生涯の大部分の時期において使用していたと結論している。

ニューマンは、比較の対象を先述の3台の楽器だけではなくベートーヴェンが使用したであろう楽器に拡大した。また、重要視されてきたベートーヴェン所有の3台の楽器を、その価値を平準化した上で、考察を行っている。これらの点から、ニューマンの論考は、より広範な視点からベートーヴェンとフォルテピアノをあつかったものと言える。

また、ヨーゼフ・メルティンの「ベートーヴェンのクラヴィアについて」(Mertin:1970)やコンラート・ザッセによる会議報告(Sasse:1971)などを見てみると、現代のピアノを演奏する際にも、ベートーヴェン時代のフォルテピアノの構造や、音の特質、そして演奏様式に対して関心を払っていかねばならない、といった事が主張されている。こうした情報は、フォルテピアノの演奏によって獲得され、より実践的な意味で現実性を帯びた問題となったものである、と言える。ベートーヴェン研究において演奏習慣がより身近な問題として意識されてきたことがうかがえる。

本節で見てきたことより、以下の事柄が指摘できる。今日では広く行われている、演奏習慣との関わりでフォルテピアノを扱う研究は、先ずモーツァルト研究において1930年代から行われ、1950年代には主要な研究分野のひとつとして定着したといえる。しかも、ブルンナーやシュテークリヒの研究を通じて、早くからモーツァルト時代の多くのフォルテピアノ(あるいはクラヴィコードなど他の鍵盤楽器)に対して注目する意識が芽生えていたと思われる。ベートーヴェン研究においては、フォルテピアノを扱った文献は早くから見られ、関心が無かったとはいえない。しかし、その対象は、紹介記事でたびたび扱われ広く認知されていたであろう、ベートーヴェンが所蔵していた3台のフォルテピアノに、主として限定されていた。その研究が、ベートーヴェン時代のフォルテピアノ全体を視野に入れ、なおかつ演奏習慣との関係を意識した形において行われるようになるのは1970年代より後であった、と言わざるを得ない。

#### 4. レコードから見るフォルテピアノの復興

では、最後に発売されたレコードを題材にして、フォルテピアノとベートーヴェン作品について見ていくことにしたい。1970年までに録音・発売されたフォルテピアノ演奏によるレコードを表にしたものが、文末に掲載した資料である。ピアノ独奏曲だけでなく、フォルテピアノが演奏に加わっているものは全て収録の範囲とした。この資料は主に、フォルテピアノの演奏による録音の広範囲なディスコグラフィである、バザールの『フォルテピアノの響き』(Basart:1985)を基本として作成した。しかし、『フォルテピアノの響き』は、情報の記載もれもあるため、各種文献に付されたディスコグラフィや雑誌の新譜紹介欄等を参照して、可能な限りもれを補うように努めた。以下、いくつかの要素について文末資料から読み取れる事柄を指摘していきたい。

フォルテピアノの演奏によるレコードについては、完全な資料が残っていないため、現在までに確認

できた物のみを表に挙げるに留まった。しかし文末資料を見てみると、初期においては、C. P. E. バッハやそして特にモーツァルトの録音が目立つことを指摘できる。実質的にベートーヴェンの録音が始まるのは、それより遅く 1960 年代半ばからである。このことに対しては、ベートーヴェンハウス所蔵のグラーフ製フォルテピアノが、1963 年に復元されたことがきっかけになっているように思われる。この楽器は長らく公開の場で演奏されることなく博物館の所蔵品となっていたが、1963 年にベルンハルト・ローコウによって復元された後、エルンスト・グレッシエルによって演奏されたのであった<sup>(注6)</sup>。そして、その後すぐにグレッシエルは、このグラーフ製フォルテピアノを用いて録音(資料、No.37)を行っているし、以後この楽器は度々録音の際に使用されているからである。

それでは引き続き、録音の際に演奏された楽器について見ていくと、ベートーヴェン作品の録音では 5 点(資料、No.46、48、49、90)以外はブロードウッド製とグラーフ製のフォルテピアノ(ベートーヴェンが所有していた楽器を含む)が用いられている事が分かる。このことは、ベートーヴェンが所有していたフォルテピアノが度々文献に取り上げられ、結果、それらの楽器の認知度が他に比べて特に高くなった事や、ベートーヴェンがこれらの楽器を好んでいたと考えられていた事の反映と考えるべきだろう。なぜならば、すでにジェームスやハーディングの著作(第3節参照)が出版されていたし、各地のコレクションに保存されている古い鍵盤楽器とその製作者たちを広範囲に扱ったフランツ・ヨーゼフ・ヒルトの『ピアノの名器』(Hirt:1955)や、より対象を限定した形ではヘルガ・ハウプトの「1791年から1815年までのウィーンの楽器製作者」(Haupt:1960)などが発表され、古い鍵盤楽器全般やそして(ニューマンによればベートーヴェンが好んだとされる)ウィーン式アクションを持つフォルテピアノに対して一定の情報提供がなされていた、と考えられるからである。

次に、どんなジャンルの作品が録音されているのかを見てみよう。1970年までの範囲で見ると、やはりモーツァルト作品は、ピアノソナタ、ソナタ以外のピアノ独奏曲、ピアノ協奏曲、ピアノを含む室内楽、歌曲(の伴奏)と幅広く取り上げられている。それに比してベートーヴェン作品は、協奏曲(資料、No.77)や室内楽作品(資料、No.72、82-84)の録音も見られるものの、ピアノソナタとソナタ以外のピアノ独奏曲にほぼ限定されていることが分かる。

また、演奏家の顔ぶれを見てみると、C. P. E. バッハやモーツァルトなど18世紀の作曲家の作品は何人もの演奏家が録音を行っているが、ベートーヴェン作品ではイェルク・デームスによる録音が中心になっている。一方1960年代には、シューベルトやシューマンといったベートーヴェン以後の作曲家の作品も録音されているが、これらもほとんどがデームスとバドゥラ=スコダの録音である。そのため、これらの作曲家の作品がベートーヴェン作品より先にフォルテピアノ演奏の対象として定着したとは考えにくい。

さて、1970年になるとベートーヴェン作品の録音が増加していることが分かるが、最後に1971年以後についても簡単に見ておきたい。この時期からは、幅広いジャンルのベートーヴェン作品が録音され、録音点数も急速に増加する。1972年までにはピアノ協奏曲<sup>(注7)</sup>、1977年には歌曲<sup>(注8)</sup>、とそれまで録音の無かった、あるいは少なかった分野の録音が現れる。そして、1971年から1980年までの録音点数

を作曲家ごとに比較してみると、ハイドン 12 点、モーツァルト 22 点、ベートーヴェン 25 点、シューベルト 22 点であり、ベートーヴェン作品の録音が相対的にも絶対的にも増加している。また、録音で使用される楽器を見てみても傾向に変化が認められる。1970 年までは、ブロードウッド製とグラーフ製のフォルテピアノのみがいわば偏向的に用いられてきた。しかしそれより以後は、シュタイン製<sup>(注 9)</sup>、シュトライヒャー製<sup>(注 10)</sup>の楽器も用いられるようになった。さらにベートーヴェン作品を録音するピアニスト<sup>(注 11)</sup>の数も増加し、フォルテピアノにおけるベートーヴェン演奏は豊かな広がりを見せるようになるのである。

以上をまとめると、次のようなことが言える。まずは、フォルテピアノが復興する過程で最初期に取り上げられたのは C. P. E. バッハやモーツァルトなどの 18 世紀後半の作品であった。そして、いち早くその対象として定着したのはモーツァルト作品であり、1950 年代までに先行して行われていた演奏習慣の研究を受ける形でフォルテピアノによる演奏も行われるようになった。そしてフォルテピアノ演奏は、その対象を 18 世紀の音楽から 19 世紀の音楽へ徐々に広げていった。その結果、ベートーヴェン作品が取り上げられるようになったのは 1960 年代の半ば以降であった。しかし、1970 年を境にして取り上げられるようになった後、1970 年代の終わりには（少なくとも録音においては）ベートーヴェン作品がフォルテピアノ演奏の中心的なレパートリーとなったのであった。

## 5. 終わりに

本論の内容は、フォルテピアノの復興とそのなかにおけるベートーヴェン作品の位置を特徴的な事項を中心に概観したものであり、今回見てきた内容からこの問題の一面を見ることは出来たが、全体的な結論を語ることは出来ない。そして本論で得た結果より、次の疑問点が課題として残された。フォルテピアノ演奏のなかで、当初は周辺のレパートリーであったベートーヴェン作品だが、一度広がりを見せた後は、急速に中心的な位置を占めるようになる。そこで、当時の人々のベートーヴェン観と、それがフォルテピアノでのベートーヴェン演奏にどのように関わっていたのか、あるいはいなかったのかという点である。その中でも特に、1970 年、ベートーヴェン生誕 200 年のメモリアル・イヤーにおける、活動の諸相についてである。文献を通じて見た場合も、レコードを通じて見た場合も、ベートーヴェンとの取り組みの中でフォルテピアノがなじみ深い存在となっていく節目が 1970 年であったからである。

いずれにしても今後は、それぞれの国や地域についての調査や、個々の人物や機関についての調査といった、個別的な調査を数多く行うことが求められる。また、今回の文献に関する調査では、その対象を楽器の問題を中心に書かれた文献のみに限らざるを得なかったが、今後は、ピアノ音楽史の文献などいわば関連領域を扱った文献において、フォルテピアノがどのように扱われているか、といった調査など、異なった角度からのアプローチも必要である。そうした多方面からの個別のアプローチを積み重ねることで、フォルテピアノの復興とそのなかにおけるベートーヴェン作品への取り組みについて、その全体像が明らかになっていくことであろう。





## 【注】

- 1) 本論において「フォルテピアノ」という用語は、特に限定をせずに使用した場合は、18・19世紀の「スタインウェイ・モデル以前」のピアノとそれらの複製楽器全般を意味しており、現代のピアノと区別するために用いている。スタインウェイ社は、1859年に単一の鑄造フレーム、交差弦方式、ダブル・エスケープメント・アクションを採用した楽器を製作し、他の製作会社に多大な影響を与えた。こうした構造は今日のピアノでも本質的には変わっていない。一方、「ピアノ協奏曲」、「ピアノソナタ」など、単に「ピアノ」としている場合は、フォルテピアノと現代のピアノを合わせたピアノ全般を指している。
- 2) アールグリムの活動については、Watchorn:1994に詳しい。アールグリムは、J. S. バッハのハーブシコードのための独奏作品を全曲録音したこと、そして、ニコラウス・アーノンクールに影響を与えた(アーノンクールは、「専門家と愛好家のためのコンサート」にヴィオラ・ダ・ガンバ奏者として参加している)という事においても、また重要である。
- 3) アールグリムとフィアラのコレクションは質、量の両面から重要なものであった。このコレクションについては『ウィーンのパッサリとモーツァルト』(Haas:1951)において、述べられている。
- 4) その際の演奏曲目は、《ディヴェルティメント 変ホ長調》K. 563、《ピアノのためのロンド》K. 511、《ピアノソナタ 二短調》K. 576、《ピアノ四重奏曲 変ホ長調》K. 493であった。
- 5) モーツァルト文献については、主に、海老沢:1977に依拠している。
- 6) このグラーフ製フォルテピアノの歴史、および1963年の復元と演奏について、詳しくはMies:1964を参照のこと。
- 7) Ludwig van Beethoven, Concerto piano and orchestra no. 1 op. 15, Bagatelles op. 33-1 ~ 7; Erich Appel, piano; Nurnberger Symphoniker; Robert Seiler, conductor (Colosseum MST 509; LP, rel. ~1972)
- 8) Ludwig van Beethoven, Songs; Christopher Hogwood, fortepiano; Martyn Hill, tenor (L'Oiseau-Lyre DSL0 603; LP, rel. 1977)
- 9) Ludwig van Beethoven, Piano sonata no. 8 op. 13; Malcom Binns, fortepiano (L'Oiseau-Lyre DSL0 535; LP, rel. 1981)など。
- 10) Ludwig van Beethoven, Piano sonata no. 8 op. 13, Bagatelle WoO 59, etc.; Jorg Demus, fortepiano (Colosseum SM 632; LP, rel. 197-)など。
- 11) 1970年代に初めてレコードを発売したピアニストには、マルコム・ピンズ、マルコム・ビルソンらがいる。また、アンドラシュ・シフ(Hungaroton SLPX 11885など)、ピーター・ゼルキン(Pro-Arte PAD-111など)といったピアニストもフォルテピアノ演奏のレコードを発売している。

## 【引用文献と主要参考文献】

- Badura-Skoda:1957 Badura-Skoda, Eva and Badura-Skoda, Paul: Mozart-Interpretation. Leipzig: Deutscher Verlag fur Musik, 1957.
- バドゥラ=スコダ:1963 エヴァ、パウル・バドゥラ=スコダ 『モーツァルト演奏法と解釈』渡辺護訳 音楽之友社、1963年
- Bannelier:1875 Bannelier, Ch.: 'The Pianoforte that Beethoven received from Sebastien Erard.' (Revue et Gazette Musicale de Paris, 42, 1875, pp. 284-?)
- Basart:1985 Basart, Ann P.: The Sound of the Fortepiano; a Discography of Recordings on Early Pianos. Berkeley, California: Fallen Leaf Press, 1985.
- Brunner:1933 Brunner, Hans: Das Klavierklangideal Mozarts und die Klaviere seiner Zeit. Augsburg, 1933.
- 海老沢:1977 海老沢敏 『モーツァルト像の軌跡(下)』音楽之友社、1977年
- Frimmel:1903 Frimmel, Theodor von: 'Von Beethovens Klavieren.' (Die Musik, 2/3, 1903, pp. 83-91)
- Ganse:1939 Ganse, Albrecht: 'Die Beziehungen Beethovens zum Instrumentbau.' (Deutsche

- Musikkultur, 4, 1939, pp. 85-89)
- Haas:1951 Haas, Robert: Bach und Mozart in Wien. Wien: Verlag Paul Kaltschmid, 1951.
- Hanslick:1875 Hanslick, Eduard: 'Beethoven Erard Flugel.' (Signale fur die Musikalische Welt, 33, 1875, pp. 929-?)
- Harding:1933 Harding, Rosamond, E. M.: The Piano-Forte; Its History Traced to the Great Exhibition of 1851. Cambridge: Cambridge University Press, 1933.
- ハスケル:1992 ハスケル,ハリー『古楽の復活 音楽の「真実の姿」を求めて』有村祐輔監訳 東京書籍、1992年
- Haupt:1960 Haupt, Helga: 'Wiener Instrumentenbauer von 1771 bis 1815.' (Studien zur Musikwissenschaft, 24, 1960, pp. 120-184)
- Hirt:1955 Hirt, Franz Josef: Meisterwerke des Klavierbaus; Geschichte der Saitenklaviere von 1440 bis 1880. Olten: Urs Graf-Verlag, 1955.
- James:1930 James, Philip: Early Keyboard Instruments; From Their Beginnings to the Year 1820. London: The Holland Press, 1930.
- Kinsky:1927 Kinsky, George: 'Beethoven and the Hammerclavier.' (Rheinische Musik- und Theater-Zeitung, 28, 1927, pp. 97-?)
- MacArdle:1973 MacArdle, Donald W. ed.: Beethoven Abstracts. Detroit: Information Coordinators Inc., 1973.
- Mertin:1970 Mertin, Josef: 'Uber die Klaviere Beethovens.' In Beethoven Almanach. pp. 91-100. Wien: Verlag Elisabeth Lafite, 1970.
- Mies:1964 Mies, Paul: 'Beethovens letzter Flugel: Geschichte und Probleme.' In Verein Beethoven-Haus Bonn 1889-1964. edited by Herbert Grundmann, pp. 19-48. Bonn: Beethovenhaus, 1964.
- Newman:1970 Newman, William S.: 'Beethoven's Pianos versus His Piano Ideals.' (Journal of the American Musicological Society, 23, 1970, pp. 484-504)
- Ruck:1956 Ruck, Ulrich: 'Mozarts Hammerflugel erbaute Anton Walter, Wien.' (Mozart-Jahrbuch 1955, 1956, pp. 246-262)
- Sakka:1967 Sakka, Keisei: 'Beethoven Klaviere: der Klavierbau und Beethovens kunstlerische Reaktion.' In Colloquium amicorum: Joseph Schmidt-Gorg zum 70. Geburtstag. edited by Siegfried Kross and Hans Schmidt, pp. 327-37. Bonn: Beethovenhaus, 1967.
- Sasse:1971 Sasse, Konrad: 'Bemerkungen zur Berucksichtigung des Klanges historischer Hammerflugel fur die Interpretation Beethovenscher Klavierwerke auf modernen Instrumenten.' In Bericht uber den Internationalen Beethoven-Kongress. pp. 559-564. Berlin: Verlag Neue Musik, 1971.
- Schneider:1940 Schneider, Max: 'Die Grenzen des Klavier.' (Schweizerische Musik-Zeitung und Sangerblatt, 80, 1940, pp. 1-7)
- Steglich:1937 Steglich, Rudolf: Mozarts Flugel klingt wieder. Nurnberg/ Salzburg, 1937. ders.: 'Studien an Mozarts Hammerflugel.' (Neues Mozart-Jahrbuch, 1, 1941, pp. 181-210)
- Tenschert:1931 Tenschert, Roland: 'Mozarts Verhaltnis zum Klavier.' (Die Musik, 24/ 1, 1931, pp. 12-16)
- Watchorn:1994 Watchorn, Peter 'Isolde Ahlgrimm and Vienna's Historic Keyboard Revival.' (Musicology Australia, 17, 1994, pp. 19-30)

(注記)

Hanslick:1875、Bannelier:1875、Kinsky:1927の3点の文献は、MacArdle:1970によってその存在と内容を確認したが、今回の調査では実際に参照することはできなかった。

## 資料 1970年までに録音・発売された、フォルテピアノの演奏を収録したレコード一覧

No.	演奏者	収録曲	録音年	発売年	レーベル・レコード番号	使用楽器	所蔵者
1	C. カウフマン	ハイドン：《クラヴィーアソナタ》H. XVI: 49		~1950	Polydor 19877		
2	アーウィン・ボドキー	モーツァルト：《ピアノソナタ》K. 309、 《アダージョ》K. 540、 《ピアノのための小ジグ》K. 574		~1951	Allegro G3012	J. A. Stein	
3	ラルフ・カークパトリック (fp)、 アレクサンダー・シュナイダー (cond) / ダンバートン室内o.	モーツァルト：《ピアノ協奏曲第17番》K. 453	1951	1951	Haydn Society HSLP 1040	John Challis (reproduction of a late 18th century piano)	
4	パウル・バドゥラ = スコダ	モーツァルト：《アダージョ》K. 540、 《アレグロとアンダンテ》K. 533、《プレリュードと フーガ》K. 394、《ロンド》K. 485、《ロンド》K. 494		~1952	Westminster WL 5153	A. Walter ca. 1785	Kunsthistorisches Museum, Wien
5	ラルフ・カークパトリック (fp)、 J. トーレル (Ms)	ハイドン：歌曲集		~1952	Haydn Society HSLP 2051		
6	ハインツ・シヨルツ、 フリッツ・ノイマイヤー (fp)、 ベルンハルト・パウムガルトナー (cond) / カメラータ・アカデミカ・オブ・ザ ルツブルク・モーツァルテウム(o.)	モーツァルト：《ピアノ協奏曲第12番》K. 414、 《ピアノソナタ》(トルコ行進曲付き) K. 331	1952	1955	Archiv ARC-3012	A. Walter 1780、 J. B. Fichtl 1790s(restored by Rueck co.)	Mozart's Geburtshaus, Salzburg (Walter)、 Neumeyer Collection?(Fichtl)
7	フリッツ・ノイマイヤー (fp)、 ブルーノ・ホフマン (Glass Harmonica)	X. シュニーダー・フォン・ヴァルテンゼー： ピアノとグラスハーモニカのための作品集	1952	1958	Archiv ARC 3111	C. Graf 1828	Rueck Collection, Germanisches Nationalmuseum, Nuernberg
8	ロニー・エブシュタイン	モーツァルト：《メヌエット》K. 355、 《ピアノソナタ》K. 570		1952	Society of Participating Artists 6	Copy of 'A. Walter 1780'	
9	ラルフ・カークパトリック	モーツァルト：《プレリュードとフーガ》K. 394、 《ピアノソナタ》K. 570、《ピアノ組曲》K. 399		1954	Bartok Society 912	John Challis (combrining various features from English and Viennese pianos of the late 18th century)	
10	パウル・バドゥラ = スコダ	モーツァルト：《幻想曲》K. 475、 《ピアノソナタ》(トルコ行進曲付き) K. 331、 《ピアノソナタ》K. 457		~1955	Westminster WL 18 028	A. Walter ca. 1785	Kunsthistorisches Museum, Wien
11	L. ザルター (fp)、 G. マルコム (hpd)、 ロンドン・バロック・アンサンブル (o.)	C. P. E.. バッハ：《二重協奏曲》W. 47		~1955	Parlophone PMA 1009		
12	モーツァルテウム・トリオ (p-t)	モーツァルト：《ピアノ三重奏曲》K. 502、K. 564		~1955	Philips A 00274L		
13	ジョン・ニューマーク	ハイドン：《クラヴィーアソナタ》H. XVI: 50、 C. P. E. バッハ：《スペインのフォリアによる12の変奏 曲》W. 118-9、 クレメンティ：《ピアノソナタ》Op. 24-3、Op. 26-3		~1955	Hallmark RS4		
14	A. ヘクシュ (fp)、 N. デ・クリージン (Vn)	モーツァルト：《ピアノとヴァイオリンのための ソナタ》K. 6-9		~1955	Epic LC 3034		
15	A. ヘクシュ (fp)、 N. デ・クリージン (Vn)	モーツァルト：《ピアノとヴァイオリンのための ソナタ》K. 378、K. 379		~1955	Philips A 00614L		
16	A. ヘクシュ (fp)、 N. デ・クリージン (Vn)	モーツァルト：《ピアノとヴァイオリンのための ソナタ》K. 306、K. 481		~1955	English Philips ABR 4028		

17	A. ヘクシュ (fp)、 N. デ・クリージン (Vn)	モーツァルト：《ピアノヴァイオリンのためのソナタ》K. 306、K. 481、 《「ああ私は恋人をなくした」による6つの変奏曲》K. 360		~1955	Epic LC 3131		
18	フリッツ・ノイマイヤー、 リリー・ベルガー (fp)	モーツァルト：《自動オルガンのためのアダージョとアレグロ》K. 594、 《4手ピアノのためのアンダンテと変奏曲》K. 501、 《4手ピアノのためのソナタ》K. 497	1955	1958	Archiv ARC-3101	A. Walter 1780 (Restored by Rueck co. in 1936)	Mozart's Geburtshaus, Salzburg
19	アルトゥール・レーザー	アレクサンダー・レネイグル： 《ピアノソナタ ホ長調》		1955?	New Records NRLP 2006	John Challis (reproduction of English piano of ca. 1795)	
20	フリッツ・ノイマイヤー (fp)、 マルゴ・ジュリアーム (S)、 フリッツ・ヴンダーリヒ (T)、他	モーツァルト：12曲の歌曲と2曲のアンサンブル	1955・56	1956	Archiv ARC 3061 (Archiv APM 14 067、Deutsche Grammophon Archiv EPA 37 121)	J. B. Fichtl Late 18th century	Neumeyer Collection
21	フリッツ・ノイマイヤー (fp)、 マルゴ・ジュリアーム (S)	モーツァルト：アリエットとカンツォネット	1955・56?		Deutsche Grammophon Archiv EPA 37 092	J. B. Fichtl Late 18th century	Neumeyer Collection
22	コンラート・ハンゼン	モーツァルト：《ピアノソナタ》K. 279-282		1957	Deutsche Grammophon LPM 18 320	English ca. 1800	Erich Thienhaus, Hamburg
23	アルトゥール・レーザー (fp)、 ルイージ・シルヴァ (Vc)	M. R. レイモント：《ピアノとチェロのための コンチェルト》		195-?	New Records NRLP 2004	John Challis (reproduction of English piano of ca. 1795)	
24	エディス・ヴァイス=マン	ハイドン：「アンダンティーノ」(作品番号不明)、 モーツァルト：「メヌエット」(作品番号不明)		195-?	Sound Book Press Society 1950		
25	フリッツ・ノイマイヤー (fp)、 リ・シュターデルマン (hpd)、 アウグスト・ヴェンツィンガー (cond) / スコラ・カントルム合奏団 (o.)	C. P. E.. バッハ：《二重協奏曲》W. 47	1960	1981	Archiv ARC-73 173	J. B. Fichtl 1790s (restored by Martin Scholz)	Neumeyer Collection?
26	エリザベス・カッツェネルレンボーゲン	C. P. E.. バッハ：《ピアノソナタ》W. 63		1960	Lyrichord LL-63	Broadwood 1796	
27	アルド・チッコリーニ (fp)、 ワルター・ランドフスカ (hpd)	《楽器「ピアノ」の歴史》 ベートーヴェン：《ピアノソナタ第6番》 Op. 10-2より、 《ピアノソナタ第8番》(悲愴) Op. 13より、 他にクーブラン、モーツァルト、ショパンの作品		1961	Columbia OL 3165	Unknown 1790、他	
28	ルドルフ・ツァルトナー (fp)、 エミール・ザイラー (Va)、 カール・ゴルヴィン (cond) / バッハ・オーケストラ・ベルリン (o.)	J. C. バッハ：《ピアノとヴィオラのための協奏曲 変ホ長調》	1962	1967	Archiv ARC 73 280	J. C. Neupert	
29	イェルク・デームス、 パウル・バドゥラ=スコダ (fp)	シューベルト：《ハンガリー風ディヴェルティスマン》 D. 818、《自作主題による8つの変奏曲》D. 813	1962	1968	RCA Victrola VICS 1329 (Harmonia Mundi 30 64..、 Harmonia Mundi 30 493 K)	J. M. Schweighofer ca. 1845、 J. M. Schweighofer 1835	Kunsthistorisches Museum, Wien
30	パウル・バドゥラ=スコダ	ハイドン：《クラヴィーアソナタ》H. XVI: 32、 H. XVI: 52、《小ディヴェルティメント》H. XVII: 6	1962		Harmonia Mundi 30 634	Broadwood 1795	Badura-Skoda Collection, Wien

31	イェルク・デームス	シューベルト：《アレグレット》D. 915、 《ピアノソナタ第13番》D. 664、 《ピアノソナタ第20番》D. 959、他	1962		Harmonia Mundi HMS 30 640	J. M. Schweighofer ca. 1845	Kunsthistorisches Museum, Wien
32	イェルク・デームス、 パウル・パドゥラ=スコダ (fp)	シューベルト：《ハンガリー風ディヴェルティスマン》 D. 818、《自作主題による8つの変奏曲》D. 813、 《ソナタ》(グラン・デュオ) D. 812	1962		BASF 29 29329-7	J. M. Schweighofer 1835、 J. B. Straicher 1841	Kunsthistorisches Museum, Wien (Schweighofer)、 Demus Collection (Straicher)
33	イェルク・デームス	ハイドン：《小ディヴェルティメント》H. XVII: 6、 モーツァルト：《ロンド》K. 511、 ベートーヴェン：《ロンド》Op. 51/2、 シューベルト：《12のドイツ舞曲》D. 790より、他	1962・64・ 65	1966	Harmonia Mundi 1C 065-99 796 (Harmonia Mundi 29 29069/7、 Harmonia Mundi 30 104 Z、 Harmonia Mundi 30 156 L、 Harmonia Mundi 30 865)	J. M. Schweighofer ca. 1845、 C. Graf 1823-25、他	Kunsthistorisches Museum, Wien (Schweighofer)、 Beethovenhaus, Bonn (Graf)
34	フランツペーター・ゲーベルス	J. C. バッハ：《「ゴッド・セイヴ・ザ・キング」に 基づく変奏曲》T. 348-3、 モーツァルト：《幻想曲》K. 397、 E. ベッピング《ピアノのためのセレナード》、他		1962	Folkways FM 3326	Prague 18th century	National Museum, Prague
35	ジョン・ニューマーク	C. P. E. バッハ：《スペインのフォリアによる 12の変奏曲》W. 118: 9、 J. C. バッハ：《ソナタ》T. 339/6、 W. F. バッハ：《フーガ》F. 31、他		1962	Folkways FM 3341	Clementi 1810 (restored by John Challis)	John Newmark
36	イェルク・デームス	ショパン：《子守唄》Op. 57、 シューベルト：《4つの即興曲》D. 935より、 シューマン：《幻想小曲集》Op. 12より、他	1963・64	1966	Harmonia Mundi 1C 065-99 797 (Harmonia Mundi 29 29069/7、 Harmonia Mundi 30 485K)	Pleyel 1845、 J. B. Straicher 1841、他	Rueck Collection, Germanisches Nationalmuseum, Nuernberg (Pleyel)、 Demus Collection (Straicher)
37	エルンスト・グレッシエル	ベートーヴェン：《ピアノソナタ第14番》(月光) Op. 27-2、《6つのエコセーズ》WoO 83		~ 1964	Colosseum M 2004 (Colosseum M 1007)	C. Graf 1823-1825	Beethovenhaus, Bonn
38	エルンスト・グレッシエル (fp)、 ルドルフ・ツェルトナー (hpd)、 エーリヒ・クロス (cond) / ニルンベルク・シンフォニカー (o.)	モーツァルト：《ピアノ協奏曲第20番》K. 466、 C. P. E. バッハ：《二重協奏曲》W. 47		~ 1964	Colosseum M 504		
39	イェルク・デームス	シューマン：《子どもの情景》Op. 15、 《蝶々》Op. 2、《アラベスク》Op. 18、 《色とりどりの小品》Op. 99より、他		1964	Harmonia Mundi 1C 151-99 773	C. Graf 1839	Kunsthistorisches Museum, Wien
40	イェルク・デームス	シューマン：《アルバムブラット集》Op. 124より、《ア ラベスク》Op. 18、 《3つのロマンス》Op. 28より、《蝶々》Op. 2、他		1964?	Harmonia Mundi 30 475 K (Harmonia Mundi HM 30 662)	C. Graf 1839、 J. B. Straicher 1841	Kunsthistorisches Museum, Wien (Graf)、 Demus Collection (Straicher)
41	イェルク・デームス	シューマン：《ウィーンの謝肉祭騒ぎ》Op. 26、 《森の情景》Op. 82		1964	Harmonia Mundi 1C 151-99 774	J. B. Straicher 1841	Demus Collection
42	ジョン・ニューマーク	クレメンティ：《ソナタ》Op. 40-1、Op. 50-3		1964	Folkways FM 3342	Clementi 1810 (restored by John Challis)	John Newmark
43	ルドルフ・ツェルトナー (fp)、 ハンス=マルティン・リンデ (fl)、 エミール・ザイラー (Va)、 クラウス・シュトルク (Vc)	C. P. E. バッハ：《フルート、ピアノ、ヴィオラ、 チェロのための四重奏曲》W. 93	1964	1964?	Archiv ARC 3251	J. C. Neupert	
44	イェルク・デームス	モーツァルト：《ピアノソナタ》K. 330、K. 331	1964	~ 1966	Harmonia Mundi 30 465K	A. Walter 1785	Kunsthistorisches Museum, Wien

45	イェルク・デームス	モーツァルト：《アンダンティーノ》K. 236、 《メヌエット》K. 355、《幻想曲》K. 475、 《ロンド》K. 511、他	1964	~ 1966	Harmonia Mundi HM 30 685	A. Walter 1785	Kunsthistorisches Museum, Wien
46	イェルク・デームス	ベートーヴェン：《ピアノソナタ第2番》Op. 2-2、《ピ アソナタ第18番》Op. 31-3	1964		Harmonia Mundi HMS 30 673	W. Stodart 1808	Demus Collection
47	イェルク・デームス (fp)、 エリー・アメリック (S)、 ハンス・ダイントナー (cl)	シューベルト：《12のドイツ舞曲》D. 790、歌曲集	1965	1965	Quintessence PMC-7099. (RCA.Victrola VICS 1405.、 Harmonia Mundi 1C 065-99 630.)	F. Rausch 1835	Demus Collection
48	イェルク・デームス	ベートーヴェン：《ピアノソナタ第11番》Op. 22、 《ピアノソナタ第13番》Op. 27-1	1965	1965	Harmonia Mundi 30 469 K	N. Streicher 1825	Musikhistoriska Museet, Stockholm
49	イェルク・デームス	ベートーヴェン：《バガテル》Op. 119-3、 《バガテル》Op. 126-5	1965?	~ 1966	Harmonia Mundi 17 065	N. Streicher 1825	Musikhistoriska Museet, Stockholm
50	パウル・パドゥラ = スコダ	ベートーヴェン：《ボロネーズ》Op. 89、 《ピアノソナタ第14番》(月光) Op. 27-2、 《ピアノソナタ第15番》Op. 28	1965	1973	BASF KHF-20326 (BASF KHF- 10316)	Broadwood 1815、 C. Graf ca. 1823、 C. Graf ca. 1827	Badura-Skoda Collection, Wien (C. Graf ca. 1827)
51	エリー・ナイ	ベートーヴェン：《アンダンテ・ファヴォリ》 WoO 57、《エリーゼのために》WoO 59、 《バイジェットの主題による6つの変奏曲》WoO 70	1965		Colosseum STM 1014	Graf 1823-1825	Beethovenhaus, Bonn
52	エリー・ナイ	ベートーヴェン：《ピアノソナタ第8番》(悲愴) Op. 13、《ピアノソナタ第32番》Op. 111	1965		Harmonia Mundi 1C 047-29 148 M	Graf 1823-1825	Beethovenhaus, Bonn
53	エリー・ナイ	ベートーヴェン：《ピアノソナタ第12番》(葬送) Op. 26	1965 ?		Colosseum MS t 1015	Graf 1823-1825	Beethovenhaus, Bonn
54	フリッツ・ノイマイヤー	ハイドン：《12の変奏曲》H. XVII: 3、《クラヴィア ソナタ》H. XVI: 6、H. XVI: 13、H. XVI: 18、他		1965	Vox SVBX 573	J. A. Stein 1785	Neumeyer Collection, Freiburg
55	ロベール・ヴェイロン = ラクロワ (fp)、 ハジェット・ドレイフス (hpd)、 カール・リステンパート (cond) / ザール室内o.	C. P. E.. バッハ：《二重協奏曲》W. 46、 J. C. バッハ：《協奏曲》T. 294/6		1965?	Westminster WST-17096 (Musical Heritage Society MHS 4047)		
56	イェルク・デームス (fp)、 エリー・アメリック (S)	シューベルト：歌曲集		~ 1966	Harmonia Mundi HM 17 044 (Harmonia Mundi HM 17 050)	J. Schrimph 1843	Demus Collection
57	イェルク・デームス	シューベルト：《2つのスケルツォ》D. 593、 《ディアベリの主題による変奏曲》D. 718、 《ピアノソナタ第18番》D. 894		~ 1966	Harmonia Mundi 30 461 K (Harmonia Mundi 17 040)	J. Schrimph 1843	Demus Collection
58	フリッツ・ノイマイヤー (fp)、 マルゴ・ジュリアーム (S)、 ヨハネス・ヘフリン (T)	グルック：オードと歌曲集		~ 1966	Deutsche Grammophon Archiv EPA 37 215	J. B. Fichtl 1795	Neumeyer Collection, Freiburg
59	コンラート・ハンゼン	モーツァルト：《ピアノソナタ》K. 284、K. 310		~ 1966	Deutsche Grammophon LPM 18 505	English ca. 1800	Erich Thienhaus, Hamburg
60	フリッツ・ノイマイヤー (fp/cond) 他	G. J. フォーグラー：《ピアノ、ヴァイオリン、 ヴィオラ、チェロのためのソナタ》		~ 1966	Deutsche Grammophon Archiv EPA 37 216	J. B. Fichtl 1795	Neumeyer Collection, Freiburg
61	パウル・パドゥラ = スコダ	モーツァルト：《幻想曲》K. 397、《ロンド》K. 485		~ 1966	Harmonia Mundi 17 014	A. Walter 1795	Kunsthistorisches Museum, Wien
62	イェルク・デームス	シューベルト：《ピアノソナタ第21番》D. 960		~ 1966	Harmonia Mundi 30 468K (Harmonia Mundi HMS 30 688)	C. Graf 1830	Musikhistoriska Museet, Stockholm
63	ライマー・キュヒラー、 インゲボルク・キュヒラー (fp)	J. G. ミューテル：《2つのピアノのためのソナタ》		~ 1966	Archiv APM 14 300 (Archiv SAPM 198 300)	Copy of Walter ca. 1790、 J. A. Stein 1788	Rueck Collection, Germanisches Nationalmuseum, Nuernberg

64	イェルク・デームス	シューマン：《交響的練習曲》Op. 13、 《幻想曲》Op. 17		~1966	Harmonia Mundi HMS 30 687	Erard 1842	Demus Collection
65	フランツ・アイプナー	ハイドン：《クラヴィーアソナタ》H. XVI: 26、 H. XVI: 27		~1966	Teldec TST 75 075	A. Walter ca. 1780	Haydn-Museum, Eisenstadt
66	エルンスト・グレッシエル	ベートーヴェン：《ポロネーズ》Op. 89、 ハイドン：《ファンタジア》H. XVII: 4		~1966	Colosseum M 1010	Broadwood 1815、J. A. Stein 1788	Rueck Collection, Germanisches Nationalmuseum, Nuernberg
67	パウル・バドゥラ = スコダ (fp)、 エドゥアルト・メルクス (Vn)	モーツァルト：《ピアノとヴァイオリンのための ソナタ》K. 454		~1966	Harmonia Mundi HM 30 630	A. Walter 1795	Kunsthistorisches Museum, Wien
68	ジャン・アントニエッティ (fp)、 A. ウイッテンボッシュ (hpd)、 グスタフ・レオンハルト (cond) / レオンハルト・コンソート、 ウィーン・コンツェントゥス・ムシ クス (o.)	C. P. E. バッハ：《二重協奏曲》W. 47	1966	1967	Telefunken 6.41210 AW	A. Walter 1787	
69	イェルク・デームス (fp)、 エリー・アメリック (S.)	シューマン：歌曲集		1967	Harmonia Mundi 1C 065-99 631 (BASF HB-29369)	C. Graf 1838	Demus Collection
70	エステール・フィッシャー、 ヴァルダ・アヴェリンク (fp)	T. アーン、S. アーノルド、S. スミス、 C. P. E. バッハ、J. C. バッハなどの作品集		1968	Peerless/Oryx 1811	Zumpe 1767、 Van der Hoef ca. 1810、 Longman & Broderip ca. 1795、他	
71	ハンス・カン	クレメンティ：《ピアノソナタ》Op. 26、 ハイドン：《ファンタジア》H. XVII: 4		1968	Musical Heritage Society MHS 862 S	Unknown Late 18th century; in the style of Franz Xaver Hubert	Ernst Knava, Wien
72	スタンリー・ホッホランド (fp)、 ヘルマン・パウマン (hmn)、 アンナー・ビルスマ (Vc) 他	ベートーヴェン：《ホルンソナタ》Op. 17、《ピアノ、 クラリネット、チェロのための三重奏曲》Op. 11	1969	1969	Telefunken 6.41251 AW (Telefunken SAWT 9547-A)	Broadwood ca. 1825	
73	モーツァルト・トリオ・オブ・ ザルツブルク (p-t)	モーツァルト：《ピアノ三重奏曲》K. 254、K. 496、 K. 548、K. 564	1969	1972	Musical Heritage Society MHS 1340-1342 (Harmonia Mundi 30 173 L、Harmonia Mundi 30 923	Ulrich Rueck (Copy of Walter ca. 1780)	
74	イェルク・デームス (fp)、 コレギウム・アウレウム合奏団 (o.)	モーツァルト：《ピアノ協奏曲第12番》K. 414、 《ピアノ協奏曲第27番》K. 595		1969	Harmonia Mundi 30 895 M	Unknown ca. 1785	Demus Collection
75	ハンス・カン、 ロザリオ・マルキアーノ (fp)、 ロムロ・ラツアルデ (g)	A. ディアベッリ：《ギターとピアノのためのソナタ》 Op. 102、《ピアノ4手のためのソナティナ》 Op. 24-2、Op. 150-2、他		1969	Musical Heritage Society MHS 916	Unknown Late 1820s	
76	ケネス・ドレーク	ベートーヴェン：《ピアノソナタ第17番》 (テンペスト) Op. 31-2、 《ピアノソナタ第30番》Op. 109		196-	Benner Publishers XTV 91254- 91255	Broadwood ca. 1850	
77	エーリヒ・アッペル (fp)、 ローベルト・ザイラー (cond) / ニュルンベルク・シンフォニカー (o.)	ベートーヴェン：《ピアノ協奏曲第1番》Op. 15、 《7つのバガテル》Op. 33		~1970	Coloseum SM 509	C. Graf 1823-1825	Beethovenhaus, Bonn
78	イェルク・デームス (fp)、 コレギウム・アウレウム合奏団 (o.)	モーツァルト：《ピアノ協奏曲》(リュッツォウ) K. 246、《ピアノ協奏曲第26番》(戴冠式) K. 537		1970	Harmonia Mundi 1C 065-99 699(BASF BAC 3003、BASF KHB 29311、Harmonia Mundi 30 512M、Pro-Arte PAL-1023)	J. Schanz 1790	Badula-Skoda Collection?



79	イェルク・デームス、 ノーマン・シェトラー (fp)	モーツァルト：《4手ピアノのためのアンダンテと 変奏曲》K. 501、 《「ああ、お母さん、あなたに申しませう」による ピアノのための12の変奏曲》265、他		1970	RCA Victorola VICS 1495(BASF 20 29093-1、 Harmonia Mundi 30 476 K)	A. Walter 1785、 A. Walter 1795	Kunsthistorisches Museum, Wien
80	エルンスト・グレッシエル	ショパン：《バラード》Op. 38、 《3つのエコセーズ》Op. 72/3、 《ワルツ》Op. 70/1、他		1970	Orpheus OR 358 (Da Camera Magna SM 9311、 Oryx EXP 64、 Music Heritage Society OR 358)	C. Graf ca. 1828	Rueck Collection, Germanisches Nationalmuseum, Nuernberg
81	ルチアーノ・スグリッツィ	クレメンティ：《ソナタ》Op. 7/3、Op. 24/2、 Op. 37/3、《ワルツ》Op. 39/1-5、7、10-12		1970	Musical Heritage Society MHS 970	J. C. Neupert	
82	モーツァルト・トリオ・オブ・ ザルツブルク (p-t)	ベートーヴェン：《3つのピアノ三重奏曲》Op. 1、《ピ アノ三重奏のための14の変奏曲》Op. 44、《ピアノ三重 奏曲》Wo0 38、他		1970	Musical Heritage Society OR 326-327	J. J. Koennicke 1800、 J. Broadwood 1802	Mozart Trio (Koennicke)、Demus Collection (Broadwood)
83	モーツァルト・トリオ・オブ・ ザルツブルク (p-t)	ベートーヴェン：《2つのピアノ三重奏曲》Op. 70、 《「私は仕立て屋カドゥ」による変奏曲》Op. 121a		1970	Musical Heritage Society OR 328-329	J. Broadwood 1802	Demus Collection
84	モーツァルト・トリオ・オブ・ ザルツブルク (p-t)	ベートーヴェン：《ピアノ三重奏曲》Op. 97、 《アレグレット》Wo0 39		1970	Musical Heritage Society OR 330	J. Broadwood 1802	Demus Collection
85	イェルク・デームス	ベートーヴェン：《メヌエット》Wo0 10-2、 《ピアノソナタ第8番》Op. 13 (悲愴)、 《ピアノソナタ第14番》(月光)Op. 27-2、他		1970	Musical Heritage Society OR 316	J. Broadwood 1802	Demus Collection
86	イェルク・デームス	ベートーヴェン：《ピアノソナタ第7番》Op. 10-3、 《ピアノソナタ第17番》(テンペスト)Op. 31-2		1970	Musical Heritage Society OR 317	J. Broadwood 1802	Demus Collection
87	イェルク・デームス	ベートーヴェン：《エリーゼのために》Wo0 59、 《アレグレット》Wo0 61、 《ピアノソナタ第25番》Op. 79、他		1970	Musical Heritage Society OR 318	J. Broadwood 1802	Demus Collection
88	ルチアーノ・スグリッツィ	ハイドン：《クラヴィーアソナタ》H. XVI: 19、 H. XVI: 28、H. XVI: 30、《ファンタジア》H. XVII: 4		1970?	Musical Heritage Society MHS 1046	J. C. Neupert?	
89	ライマー・キュヒラー、 インゲボルク・キュヒラー (fp)、 エドゥアルト・メルクス (cond) / カペラ・アカデミカ・ウィーン	C. P. E. バッハ：《二重協奏曲》W. 46、 《ソナティーナ第2番》W. 107、他	1970	1971	Archiv 2533 078	Wilhelm Rueck (Copy of Viennese piano, Unknown Last third of the 18th century)	Badura-Skoda Collection
90	ヤン・パネンカ、 ハンス・カン (fp)	ベートーヴェン：《ピアノソナタ第6番》Op. 10-2、他に J. B. クラマー、J. N. フンメル、 J. L. ドゥセックらの作品	1970		Supraphon 1 11 1231-2	Boesendorfer 1830	Hans Kann
91	イェルク・デームス	ベートーヴェン：《エリーゼのために》Wo059、 《ピアノソナタ第25番》Op. 79、 《ピアノソナタ第27番》Op. 90、他	1970	1974	Musical Heritage Society MHS 3038	J. Broadwood 1817	Hungary National Museum, Budapest
92	イェルク・デームス	ベートーヴェン：《バガテル》Op. 126-3、 《ピアノソナタ第26番》(告别)Op. 81a、 《ピアノソナタ第32番》Op. 111	1970	1974	Musical Heritage Society MHS 3039	C. Graf 1823-1825	Beethovenhaus, Bonn
No.	演奏者	収録曲	録音年	発売年	レーベル・レコード番号	使用楽器	所蔵者

表中の楽器名・声域の略号は次のとおり。cl (クラリネット)、cond (指揮)、fp (フォルテピアノ)、fl (フルート)、g (ギター)、hrn (ホルン)、hpd (ハーブシコード)、Ms (メソソプラノ)、o. (管弦楽団)、p-t (ピアノトリオ)、S (ソプラノ)、T (テノール)、Va (ヴィオラ)、Vc (チェロ)、Vn (ヴァイオリン)。なお特に記載の無い場合はフォルテピアノを意味する。

ベートーヴェン作品を含むものは網掛けで表した。

内容が全く同じで再発売されたものは括弧内に発売番号を記した。一部でも内容が異なっていた場合には、各々を別のレコードとして扱った。

使用楽器の欄では、製作者、制作年代の順に記し、補足事項はその後の括弧内に記した。